資　料

「箱庭研究会」の歩み

青木真理

1．はじめに

「箱庭研究会」は，地域創造支援センターに登録されている研究会で，その発足は以下の通りである。

1997年から始まった教育学部附属教育実践総合センターの「教育相談」研修講座（2001年度からは「教育実践」研修講座と改名）[1]を３年連続して受講した受講生のなかから勉強を続けたいという声が生まれた。この研修講座は開設当初より継続研修を可とし，奨励していたが，参加希望者が年々増加し，継続研修は３年までと限定せざるを得なくなったことがきっかけである。須藤博子（日大東北高校スクールカウンセラー）などが発起人となって，2000年，「箱庭研究会」は生まれた。箱庭療法などの表現療法の実際を中心に，臨床心理学について学ぶという目的からこのような名称がつけられた。例会は月１回２時間程とし，筆者がその講師を務めることになった。発足当時の会員は17名，いずれも「教育相談」研修講座の修了生で，大部分が教員であった。

その後各年度での会員数はだいたい10数名から20数名までを推移しており，その属性は，教員のほか，スクールカウンセラー，電話相談員，大学院生などである。年度ごとに会員が幹事をつとめる。また年度はじめに実費を徴収している。

2002年からは，地域創造支援センターの登録研究会となり，現在に至る。

本稿では，５年目を迎える本研究会のこれまでの歩みをふりかえり，会員に実施したアンケートの結果もふまえて，その活動の意義と今後の可能性について考察することを目的とする。

2．「箱庭研究会」の活動の経過

1）2000年度

会員数17名。例会回数は９回。『箱庭療法入門』（河合隼雄著，誠信書房，1969）をテキストに，レポーターを交代でつとめての輪読を行ったほか，受講生が箱庭作品を実際に作り，それについて討議する時間をもった。また，受講生の所属する学校等での教育臨床事例の検討，講師のスクールカウンセリング活動の紹介と討議などを行った。

2）2001年度

例会回数は10回。

『箱庭療法入門』を読了し，続いて『コラージュ療法入門』（森谷寛之ほか編著，創元社，1993）をテキストにした輪読を行った。受講生の箱庭作品づくり，コラージュ作品づくりといった実習のほか，学校現場でのコラージュ作品づくりを導入した受講生からその活動の紹介がなされた。

3）2002年度

例会回数は８回。

『コラージュ療法』の輪読と，MSSM 法[2]実習，中学生のコラージュ作品の検討，高校生の箱庭事例の検討，通級教室におけるコラージュ・スクウィグルを取りいれた指導事例の検討などを行った。１月の例会では連歌[3]を行った。

この年から地域創造支援センターの登録研究会として位置付けられ，あわせてセンター事業の一環としての学術講演会を企画・運営した。2003年３月８日，中森孜郎氏[4]（宮城教育大学名誉教授・みやぎ教育文化研究センター所長）を講師に，「日本人と民舞」と題

する講演ならびに「からだほぐし－『野口体操』を中心に－」と題するワークショップを行った。この講演会への参加者は，本研究会会員を中心に非会員の学校教員数名を含んでいた。

4）2003年度

例会回数は11回。

『コラージュ療法入門』を読了したので，『事例に学ぶ心理療法』（河合隼雄編著，日本評論社，1990）をテキストとした。その他，小学生のコラージュ作品検討，連歌などを行った。

5）今年度

引き続き『事例に学ぶ心理療法』を輪読している。小学生のコラージュ作品，バウムテスト事例を検討した。また，7月26，27日の両日，竹内敏晴氏[5)]を講師に招き，「からだとことばのレッスン」と題するワークショップを開催した。このワークショップは地域創造支援センターの事業の一環とし，センター共催で行われた。参加者には，本会員ほか，学校臨床心理専攻の大学院生，会員の知り合いの学校教員なども含まれていた。

3．会員へのアンケート

本研究会の活動について検討するために，本年度会員のうち，4月から7月までの4回の例会に参加した会員（18名）にむけて，箱庭研究会への意見を求めるアンケートへの協力を依頼し（実施日2004年7月26日），回答を得た（11名　回収率61.1%）。アンケートの項目は表1に示した。

この項ではアンケートの結果を示し，それについての検討を行う。

表1　箱庭研究会アンケート項目

1．お名前　　ご職業

2．いままで箱庭研究会で行ってきた活動のうち，よかったものを3つ選んで○をつけてください。
① 心理臨床の本の輪読
② 箱庭，コラージュ，スクウィグルなどの実習
③ ワークショップ
④ 会員が報告する事例研究
⑤ 会員が報告するコラージュ，バウムテストなどの事例の検討
⑥ 連歌
⑦ 懇親会
⑧ その他（　　）

3．活動頻度，時間（長さ，開始時刻）などについてご意見ありましたら書いてください。

4．箱庭研究会について自由に考えを書いてください。

5．これからの活動について，要望などがありましたら書いてください。

1）箱庭研究会の活動内容

いままでの活動内容のなかでよかったものについて3つ選ぶよう求めた。その結果を表2に示す。

表2　活動内容のよかったもの
数字は選択者の数（多い順に示す）

ワークショップ	10
心理臨床の本の輪読	5
会員が報告するコラージュ，バウムテストなどの事例の検討	5
箱庭，コラージュ，スクウィグルなどの実習	5
会員が報告する事例研究	4

2002年度の中森孜郎氏，2004年度の竹内敏晴氏のワークショップについて，よかったとする声が多い。

2）活動頻度，時間について

現在，月1回土曜日（第1もしくは第3）の午前10時から12時まで行っているが，おおかたはこの頻度と時間帯に賛成という意見であった。ただ，なるべく固定してほしいという意見もあった。会津，南会津といった遠方からの参加の会員にとっても，10時開始はちょうどよいということである。

3）箱庭研究会についての意見

自由記述で箱庭研究会についての意見を求めたところ，以下のような意見が得られた。

- 目的を同じくする仲間と楽しく参加しています。（小学校教員）
- 参加して日が浅いのですが，学校種の異なる教員の方や，スクールカウンセラーの方や他の相談機関に所属されている方々など，多くの方と会終了後などもお話できる機会があるのは本当に貴重だと思っています。（高校教員）
- 箱庭を基本として，さまざまな体験ができ，多くの気づきがありました。小学校の教育現場の事例をと

おして，今子どもたちが抱える問題の深刻さも知ることができ，予防的な援助の重要性を改めて感じました。(高校スクールカウンセラー)

・仕事をしていると，困った問題は多くありますが，これらに対応するための研修にはなかなか参加できないので，継続して勉強できることや講師からのスーパーバイズが得られることが私にとっては貴重です。会の皆さんとネットワークがつながっているのも心強いところです。(小学校教員)

・去年4月からまぜていただきましたが，会の発祥のきっかけなどを聞くにつれ，そうした先生方の情熱が根底にあるからこそ，こうやって続いているんだなあとつくづく思っています。私としてはこの会は，年代，仕事などそれぞれの方々が集まるところに意義があるように思います。事例報告なども勉強になるのですが，理論的なことについての勉強会は現場に出ていくと減るので，たいへん意味があると思います。その意味でも輪読はいい勉強になりました。(中学・高校スクールカウンセラー)

・臨床心理について勉強できる機会であり，感謝しています。本を一人で読んだりするだけでは理解が浅いので，講師のコメントがとても勉強になります。また，会員の方々が実施した心理テストなどを見せていただき，事例や解釈を聞くことができる貴重な機会です。教員以外の方とのつながりもでき，勉強以外の情報交換，雑談できるのが嬉しいです。(養護学校教員)

・継続的に研修ができる場として，大変貴重です。内容的にも幅広く研修できる柔軟性がうれしく，深く密度の濃い研修ができるのがありがたいです。(小学校教員)

・何か困ったことが起きたら講師にたずねることができるという支えになっています。また皆様との意見の交換も大変ためになっております。(子育て相談員)

・これからも事例について指導お願いしたいと思います。(養護施設心理療法士)

これらの回答を要約すれば，会員にとっての参加の意義は，臨床心理学について理論面と実践面の両面を学ぶことができること，会に連なるメンバー同士のネットワークが支えになること，メンバーの属性の多様性ゆえに情報と学びの幅が広いこと，講師の助言の有効性，会の継続性と定期性などである。

4）箱庭研究会への要望

要望についての自由記述を求めた。それらを以下に示す。

・輪読にプラスして，実際のコラージュ，バウムなどの事例検討という二段構えだとより充実した時間になるようにも感じます。(中学・高校スクールカウンセラー，高校講師ほか)

・年1回くらいのペースでワークショップか講演会をこれからも開催できるといいです。(小学校教員ほか)

・知り合いの養護教諭が発足当初活動に参加されていたので，研究会の存在は知っていましたが，詳しい活動内容や参加する術は知りませんでした。会の規模は現在くらいが活動しやすいのかもしれませんが，関心のある人に広報することも考えていいのではないかと思います。また，箱庭療法のテキストの輪読は数年前に終わっていますが，後から入った者にとっては，定期的に箱庭の学習もとりいれていただきたいと思います。(高校教員)

・教育現場の事例検討は，ここしばらくないので，またやりたいと思います。(子育て相談員)

・ユングやウィニコット，アクスラインなど，臨床家必読の本を皆さんと一緒に読んでいけたら嬉しいです。

・会員の方々との交流を深めるような連歌などもおもしろかったので，また機会があったら，と思います。(養護施設心理療法士)

現在の活動を維持するほかに，検討すべき要望としては，例会の構造の問題と広報という2点が重要と思われる。

これまで例会は明確に構造化されてこなかった。輪読のレポートについて討議するなかで，所属校で関わっている事例の話題が出てそれについての議論がなされるというような会が多かった。アンケートの回答にみられる，理論書の輪読による体系的な学びと，事例検討または実習の二部構成を求める提案をとりいれていくことが必要であろう。

広報に関しては，本会の参加者は「教育相談」研修講座修了生の発起人を中心に，口コミで広がってきたものである（もちろん，途中で参加しなくなった人もある)。20名前後という議論のしやすい規模を維持するメリットは十分あるが，広報にもう少し積極的になってもいいのかもしれない。

もう1点付け加えておくと，講演ないしはワークショップは筆者にとっても会員にとっても新しい体験を積むことができて貴重な機会となっている。今年度のワークショップについてはまた別稿にて報告したいと考えている。

4．箱庭研究会の意義と課題

「教育相談」研修講座修了の有志の希望から発足した本研究会は，発足当初の目標としては，研修講座に継続して参加できない人に，研修の機会を与えるということであった。その後「教育相談」研修講座は，「教育実践」研修講座となり，講師とクラスの回数を増やすことで，受講生の継続参加年数の制限をなくした。それゆえ本研究会の会員も再び研修講座で学ぶことができるようになった。

また，社会人の研修という点では，2001年度，大学院教育学研究科に学校臨床心理専攻（昼夜間開講）が作られたことにより，大学院という研修と学びの場があらたに開かれた。発足当初の箱庭研究会会員のなかから3名の大学院生・修了生が生まれ，また逆に，大学院生や修了生のなかから箱庭研究会に入会する人も多い。

このように社会人にとっての研修のメニューはここ数年で多様化している。そのなかで，本会が消失せずに現在まで活動を続けているのは，「教育実践」研修講座・大学院とはまた異なる参加意義が本会にはあるということであろう。それは，アンケートの検討のところで明かにしたように，会員同士のネットワーク，理論と実践の両面の学び，継続的で定期的な研修機会というようなところであろう。

本研究会自体が明確な達成目標をもっているわけではない。本研究会は，多様な立場（教員，カウンセラー，相談員など）で教育臨床・心理臨床に携わる人たちの群れ，ゆるやかな共同体である。もしこの共同体に目的性があるとすれば，構成員の，時として孤独な作業ともなりうる教育臨床・心理臨床の営みを生き生きと継続し深化するための基盤となりうることといえようか。2002年度の中森孜郎氏，本年度の竹内敏晴氏という2つのワークショップを企画・運営できたのも，本会の共同体性に支えられてのことである。この共同体において何らかの活力を得た個々の構成員がそれぞれ属するフィールドにおいての貢献を果たすことが期待される。

また，会員間の連絡など様々なコーディネーションに尽力いただく幹事の仕事なくしては，本会は成立しえないことを最後に付して本論を終わりとする。

注

1）筆者らは以下のように述べた。「教育実践総合センターでは1997年度より，主に現職教員ならびに教育相談に関わる人たちを対象に，月1回の『教育相談』研修講座を開講し，その都度，報告を行なってきた」「また，1999年度からは『学校教育』研修講座が開講され，ここでは主に総合的学習の時間の実践の検討を行ってきた。2001年度からはこれらの2種類の研修講座を一本化した教育実践講座がスタートした。」（青木真理・中野明徳・生島浩・中田洋二郎・鈴木庸裕・水野晴夫・昼田源四郎「教育実践総合センター『教育実践』研修講座について 2001年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討」2002 福島大学教育実践研究紀要第43号）

2）Mutual Scribble Story Making Method（相互殴りがき物語統合法）。山中康裕により考案された表現療法の一種ので，セラピストとクライエントが相互に殴りがき（自由な描線）とそれへのみたてを繰り返し，できあがったみたてをつなげてクライエントが物語をつくるというもの。

3）数人のグループで順に上の句（五・七・五）と下の句（七・七）をつなげていく連歌は，集団療法，表現療法のひとつとして臨床場面で用いられることがある。

4）中森孜郎氏は，日本の各地に伝わる民俗舞踊，太鼓などを取り入れそれを子どもたちや大学生に教える実践を「民舞教育」と呼び積極的に展開してきた。著書に『日本の子どもに日本の踊りを』大修館書店 1990など。

5）竹内敏晴氏は演出家として舞台芸術の場で活躍する一方「からだとことばのレッスン」と題するレッスンを各地で展開，からだを通じて人とかかわるという命題を追求しつづけている。著書に『ことばが劈かれるとき』思想の科学社 1975ほか。